

朝鮮

忘れたいが忘れられない昔

茨城県 篁 尚

敗戦の折り、私は北朝鮮の清津という街に住んでいました。清津は今、北朝鮮の工作船の基地などでテレビに時々でて、話題になっている所です。父は通信省の官吏でした。昭和十九（一九四四）年十月末のころ、清津に転勤になりました。寒い街でした。当時旧制中学生だった私は、毎日学徒動員で三菱精錬所という製鉄工場に行き、昼夜三交代で働いていました。今でははっきりしませんが、八月四日か五日に双発の飛行機一機と四、五機の単発機が、私たちの宿舍の上を通過し、埠頭

の方に飛んで行くのを見ていました。翼に赤い星が見えましたが、それがソ連軍機のマークだとは知りませんでした。その編隊は埠頭を爆撃し、北の方に去って行きました。

そのことがあって二日後だったと思いますが、急に学徒動員解除になり、私たちは三菱精錬所の寮を後にして家路に就きました。やっと苛酷な仕事から解放され我が家に帰れるという喜びで、皆、心浮き浮きとして友達とお喋りしたりしながら、街の方に足を運びました。だが、街の様子がいつもと違っていました。人影は少なく、淋しい街並みになっていました。清津という街は、満州からの農産物を日本に送り出す港町で、いつもは活気に満ちた街でした。家に帰り着いたのに家にはだ

れもおらず、空き家同然でした。仕方なく父の勤務先の郵便局に行ったところ、母たちは強制疎開で街を出たと聞かされました。父からは局にいるように言われたのですが、父や課長さんたちが忙しそうに電話をしたり部下たちに何やら命令したりなどして、緊迫した空気の中では居心地が悪く、父には家に本を取りに行くと言って局を出て街を歩いていると、一級下の金崎君と会ったのです。金崎君も家に帰ったのですが、家にはだれもいないし行く所がないので、ただ街をぶらりぶらりと歩いていたとかでした。「それなら、私の家へ来るか」と誘って家に連れて行き、本を読みながら時間を過ごしているうちに、寝てしまいました。

何時間が過ぎたか定かではありませんが、「ドカン！」という炸裂音で目が覚め、外に出て空を見ました。炸裂音は空爆とばかり思っていたのですが、空を見ても飛行機は飛んでいませんでした。そのときに突然、「シユルシユル」という音が頭

上を通り過ぎたかと思ったら急に音が消え、次の瞬間に凄惨な炸裂音がして火の手が上がり、破片がばらばらと降ってきました。後から後から続く「シユルシユル」という音と炸裂音、そして火の手があちらこちらで上がり、ただただ驚きと恐ろしさで足がすくんで動けませんでした。

どのくらい時間が過ぎたかよく覚えていませんが、砲撃が止んだので走って郵便局まで行きました。しかし、そこにあったはずの局舎は無くなり、鉄骨が無惨に曲がった姿で転がり、コンクリートの残骸が山になっていました。父の行方も分からないので、そのまま官舎に引き返して、その夜は金崎君と二人で寝ることになりました。夜中の何時ごろだったか知りませんが、急に外が騒がしくなってきたので出てみると、兵隊たちが大勢集まっています。そのうちの一人に声を掛け状況を聞いたのですが、「大丈夫、安心して寝てなさい」と言われたので、その言葉を信じて再びぐっすり寝込んでしまいました。

目が覚めると、もう外はすっかり明るくなっていました。朝食を作るために、金崎君に七輪を庭に持ち出し火を起こしてもらい、私は米を洗って鍋に入れ、庭に持って行くために縁側に出たところ、昨夜、兵隊が集まっていた塀の外に、見慣れない服装の兵隊らしき者が二人歩いていました。「変な兵隊だなあ」と思っで見つめていると、その兵隊も私に気付き、銃を構えました。私は、銃と鉄兜が見慣れている日本兵のとは違うなと思っ
てなお見ていると、その兵隊が何か言葉を掛けてきたのです。それで、これは日本兵ではないと感じ、持っていた鍋を投げ捨てて「金崎、逃げる！」と怒鳴りながら横飛びに二メートルぐらいの石垣を飛び降りました。そのとき何発か撃たれたのですが、当たらなかつたことは幸いでした。その音で金崎君も気が付いて、私の後を追って走って来ました。そのときなぜ大通りに出ようと思ったのかは、今でも分かりません。途中まで走ったとき、大通りにもソ連兵がいるのに気が付き、とっさに

横の路地に逃げ込みました。さらに奥に向かって走って行くと、その路地は行き止まりでした。行き場をなくした私たちは足もとにあったどぶ板を上げ、金崎君を先にして下水路の中に入りました。下水路はあまり深くなかつたので、四つんばいになってどぶ板を元通りに直して隠れていました。しばらくして、頭上のどぶ板の上を、ソ連兵が何人か行ったり来たりしていましたので、私たちはただただ恐怖の連続でした。下水路の中で四つんばいになつたまま、息を凝らし夜暗くなるまでただじつとしていたのですが、金崎君が「俺の家は天井裏に上がれる」と言い出しました。隠れるにはその方が良くということになり、夜になるのを待って下水路から出て、周囲に注意を払いながら、塀を乗り越えたり空き家を通り抜けたりしながら、金崎君の家にとり着きました。二階に上がり、押入の天井板を押し上げ、天井裏に入つたときには、天国に着いたような気がしました。金崎君の家は蒲鉾屋さんで、正面から見ると二階

の上の方に飾り窓が二つあり、三階建てのような作りでしたので、天井裏といいながら昼間は明るく、結構居心地が良い部屋でした。寝るときは、梁にまたがって束柱につかまって寝ました。

二、三日が過ぎたときだと思いますが、飾り窓のガラスが突然撃ち抜かれ、外の様子がよく見えるようになりました。家の正面は高森山という山で、松の木に包まれた緑の山でしたが、連日の砲撃でゴロゴロした岩肌が見えるようになり、その岩の間を兵隊が走っているのがちらちらと見えていました。

何日かして砲声銃声が止み、日本軍が制圧されたことが私たちにも分かりました。ソ連軍の捕虜になるなら、自決しようと話し合いました。そして、私が金崎君の首を、金崎君が私の首を絞め合いい、お互いの首にバンドを巻きつけて、力いっぱい絞め合いました。絞められたとき、苦しいとは感じませんでした。ただ頭の中が熱くなったことは、今でも鮮明に覚えています。そのうちに、気

を失ってしまいました。

どのくらい時間が過ぎたか分かりませんが、ふと気が付き見覚えのある所だなあと感じながら見回したら、金崎君も気が付いたようで、話し掛けてきました。これではいけないと、その後二回も首を絞め合ったのですが、死ぬことはできませんでした。三回もやって死ねないのだから、何とか生き抜こうということになりました。まず食べ物を探さなくてはと、夜になるのを待って泥棒猫のように空き家に忍び込んで、非常食として配給になっていた缶詰などを集めてきて、金崎君の家の天井裏に運び込みました。水は、一升瓶に防火用水の水や風呂の水を詰めて飲みました。ソ連軍の侵攻が突然であったために、何も持たずに逃げ出した家が多く、食料品は割合豊富に残っていました。私たちは毎晩のように出掛けては、食料品を集め天井裏に運び込みました。そして、二人で一日に缶詰一個だけを食べて、他はこれから先に備えていました。口に入れる方は何とか解決してい

ましたが、出す方のうち大は「オマル」を見つけ
て持ち込み、小の方は飲み水をくんでくる一升瓶
を使いました。水くみに出たときに中身を捨てて、
その瓶に新たに水をくんで来るのです。食料品を
集めるときに一番恐ろしかったのは、猫でした。
犬は家の人の後に付いて行ったのでしよう、一匹
もいませんでしたが、猫は家の中に隠れていて、
暗闇の中、手探りで食料品探しに夢中の私たちの
鼻先に、突然飛び出すのです。心臓が止まるほど
驚くというのはあのようなことを言うのだろうと、
今でも時々思い出しています。

天井裏に入って二カ月くらい過ぎ、朝晩大分寒
くなってきたころのことです。飾り窓から下を見
ていたら、日本人の女の人が歩いていました。
私たちは夢中で壁土をむしり取って、壊れた飾り
窓の間から投げました。幸いに気付いてくれて、
二階まで上がって来てくれました。金崎君の知っ
ている人のようでした。そのときに、日本は負け
て無条件降伏したということを知られました。

そして、女学校谷の方に日本人会事務所ができ、
日本人はその街筋に集まって住んでいることな
どを教えてくださいました。この女性は、その後お握
りを持って来てくれました。何か月ぶりかで口に
したお握りの味は感激でした。そのときのおいし
かった味、今でも鮮明に覚えています。それを機
会に、天井裏からときどき街に出るようになりま
した。天井裏から街に出たときの気持ちは、筆舌
に尽くせません。狭い所から広い街並み、澄み渡
った青い空、開放感まぶしい太陽の光。素晴らし
い世界でした。まさに極楽浄土にいるような気持
ちでした。女学校谷の中にある日本人会に行き事
情を話し、住む場所を世話してくださいと頼んで
帰りました。天井裏にいるより、広い街を歩いて
いる方が気持ちが良いので、野良犬のように当て
もなくぶらぶら歩き回りました。

だんだんと行動半径が大きくなってきたときに、
思わぬ落とし穴がありました。ソ連という国は変
わっている国です。大きな交差点には、踏切の遮

断機のようなものがついていて、通る車、人すべてを一時止め、身分証明書を確認するのです。私たちは天井裏に住んでいましたので、身分証とか良民証とかいう、ソ連発行の証明書を持っていませんでした。そのため捕まって、刑務所に入れられ取り調べを受けました。学生だということが分かっていたので、半日ぐらいで出所できましたが、出所の条件として労働が課せられました。取調官がジェスチャーで土を掘る格好を示したので、土方をさせられるのだと思いました。裏の広場に連れて行かれると、何人もの人々がスコップやつるはしを持たされて不安そうな顔をして立っていました。私は、そこに鳶口が三本立てかけてあるのを見付け、金崎君に鳶口を持つように言い、私も持ちました。スコップやつるはしより楽ができると思ったのですが、その思いは正反対で、これが悪夢の始まりになるとは考えもつかないことでした。

何か言ったのですが、ロシア語の全然分からないうちは、腕自慢をしているくらいに思っていたのです。山の中腹近くまで登ったころ、濃い脂が焦げるような匂いが鼻を突くようになってきたのです。嫌な匂いだなあと、金崎君と話をしながら登って行きました。そのときソ連兵が、「パイパイ」と口笛を吹き「ダワイ、ダワイ」と私たちを呼ぶのでその方へ行くと、そこには服を着た白骨死体があちらこちらに転がっていました。恐怖と驚きで一瞬身体が硬直しましたが、次の瞬間死体から一歩でも離れたいという衝動が全身を駆けめぐり、脱兎のように走り出しました。後ろの方で何か叫んでいるのは聞こえていましたが、夢中で走り続けました。そのとき「パーン！」と銃声があったのと同時に、左耳のそばを「ビューン！」と弾が飛びました。次の瞬間、今度は右の耳元をまた弾が飛び抜けました。そのときになって、途中で松笠を撃ち落して見せたのは、逃げたら殺すぞということだったのだと、初めて気が付きまし

た。走るのを止めて「ダワイ ダワイ」と呼ぶソ連兵の所に戻り、言われるとおりに服を着た白骨死体を鳶口で引っかけ、尾根に掘ってあった日本軍の塹壕の中に引き落としました。ガタガタと崩れるように落ちましたが、バラバラにはなりませんでした。学校の理科室にあった、骨格の標本そっくりでした。死後三カ月近く経った死体は白骨化し、服を着た骸骨になっていたようです。そんな死骸を鳶口で引っかけ、デコボコの斜面を引き上げていきますと、服を着た白骨死体が踊り出すのです。死体のあった地面は死体と同じ形で、そこには蛆虫がうごめいていました。この光景をどう表現して良いのか、いまだに分かりません。

この山の斜面に倒れていた何千何百という死体は、皆非戦闘員でした。ソ連軍の急な侵攻で、日本軍の陣地の方に逃げればと思ったのでしよう。服装を見た感じでは、年寄りと女、子供でした。何体片付けたか分かりませんが、三日も作業していると、もうなにも感じなくなり、ただ物を片付

けているというような感覚でしたが、ただ一体だけ他の遺体と異なり、涙が出た遺体がありました。それは、大きな頭蓋骨の後ろに小さな頭蓋骨がくっついた状態で、うつぶせになっていました。ちゃんちゃんこに包まれて、お母さんが背負っていたようでした。お母さんと一緒に死んだのなら、まだ救いがあったのですが、もしお母さんが先に死んでいたとしたら、背中の子供は餓死したことになります。さぞ苦しかったことでしょう。もう感情が麻痺していた私でしたが、その遺体を片付けるときは自然と涙が出てきました。

幾日か続いた遺体の片付け作業からやっと解放され、女学校谷の一番奥にあったお寺に世話になるようになり、やっと平穏な日常が戻ってきました。

朝夕は大分寒くなってきて、冬の到来をひしひしと感じるようになり、夏の服しか持っていない我々は、一歩でも南に行ったほうが良いのではと、清津から脱出することに決め、少々の食糧を持っ

て駅に行き、たまたま停まっていた貨物列車に乗り込みました。しかし、すぐに日本人と分かかって追いつかれ、仕方なく有蓋貨車の屋根の上に乗りました。走り出した列車は気ままな走り方で、一時間も二時間も走り続けたり、半日も止まったまままでいたりしました。どうせ止まったからには、また半日くらい止まっているのだろうと思って、のんびり用を足していると、すぐに動き出したりと変速運転でしたので、列車が駅に止まると急いで下りて用を足しました。後から降りた人は用を足している人の前に出て、次の人はまたその前に、男も女も若い娘さんも恥ずかしいなど言っていて、いられません。いつ列車が動き出すか分からないのですから、致し方ないことでした。後日聞いたことですが、娘さんが用足しに行っている間に列車が動き出してしまい、乗り遅れてしまったとかで、大声を出して泣きわめいているお母さんがいたとのことでした。このような状態の列車ですから、数日分しか持っていなかった食糧も、

すぐになくなってしまいました。

空腹を抱え、動かない列車のそばで座り込んでいたら、「覓だろ」と声を掛けられました。上目遣いで見ると、京城商業生のときに、道立商業の学生で、街で行き会おうと喧嘩をしていた、日本名「スムラ」という朝鮮人でした。まずいやつに見付かったと思いい、知らん顔をしていたのですが、肩を叩かれ再度声を掛けられては知らん顔もできず、今分かったような顔をして「やあスムラか、何でこんな所にいるんだ！」と言うと、「両親を捜しに来たのだ」とのことでした。彼からも「覓は何でここにいるのだ」と聞かれたので、今までのことを話したら彼は大変同情してくれて、「肌の色の違う人種に、解放だとか言われてその気になっっているが、後で植民地になるだけだ。同じ肌の人間同士が助け合わなくては駄目だ」と言っていて、私たち二人の食事から着るものまで、いろいろと面倒をみてくれました。

それからは私たちと同行して、一路元山を目指

して南下しました。何日かかったか今では思い出せませんが、何とか無事に感興までたどり着きました。金崎君とは再会を約してここで別れ、私とスムラは元山に向かってまた南下を続けました。

元山に入って知人の家を訪ねると、父母姉妹の居所が分かり、再会することができました。そのときの気持ちは、ただただ嬉しいと表現するよりほかに言いようがありませんでした。毎日が夢心地でした。その後、スムラは二、三日休んだ後京城（ソウル）に行くというので、父は電信課の若い人たちや、電話課の交換手をしていた若い娘さんたちを連れて行ってくれと頼み、総勢三十人ぐらいを彼に託しました。父は無事に京城に着いたかと毎日心配していたところ、二週間くらい過ぎたところに、スムラがひょこりと私たちの前に現れ、父に「無事に全員を京城の日本人世話会に引き渡してきました」と報告しました。

父に報告に来たスムラが再び京城に帰るというので、父が私に「一緒に京城に連れて行ってもら

え」と言ったのですが、生死の分からない兄をここで父と一緒に待とうと思ひ、私は同行しませんでした。それからはソ連軍の荷役に出たり、朝鮮人の農家に手間取りに行ったりして、なんとか食いつないでいました。

昭和二十一年四月ごろになると、三十八度線の警備がだんだんと厳しくなってきたという話が伝わってきましたので、父と話し合って、今のうちに三十八度線を突破して京城に行こうということになり、毎日その準備をしました。しかし、消息の分からない兄のことがありましたので、父の心の内はさぞ苦しかったと思ひましたし、私も後ろ髪をひかれるような思ひでした。汽車に乗って鉄原まで南下し、日中は山の中に隠れ、夜中になって音を立てないようにして歩きました。

七日目だと思ひますが、三十八度線の東豆川に着きました。夜明け前の四時ごろを見計らって川を渡りました。川は雪解け水ですごく冷たく、川底の砂利は粒が大きく足の裏は痛いし、気ばかり

焦って転ぶ人が何人もいました。父も転んで流されました。私は夢中で追いかけて、十メートルくらい行った所で追いつき、背負って向こう岸に上がってほっとしました。やっと国境を越えたのです。一刻も早くこの国境線の川から離れた方が良いと思います、林の中の小道をどンドン林の奥に向かって歩きました。林が切れて見通しがきくようになり、川からも大分離れたのもう安心とほっとしながら歩いてみると、広場一面に天幕が張られているのが見えました。天幕の側には、銃を持った兵隊が立っていました。ソ連兵に対する恐怖心がある私たちは、とっさに逃げようと思ったのですが、よく見ると天幕の上には米国の国旗があるのを見て、三十八度線を突破した実感が湧き、安心から緊張感が消えてしまい、へたへたと道端に座り込んでしまいました。私たちを見付けた米兵に促されて天幕の中に入ると、DDTを頭といわず背中、腹、下半身、足から靴の中まで、真っ白になるまで吹きかけられてから、京城行き切符を渡され

ました。客車に乗ったときには、何だか知りませんが涙が出てきました。

京城の街内は、戦前と同じでお菓子屋さんの店頭には菓子類が豊富に並び、衣料品屋さんにはいろいろな衣類が置いてありました。別世界にきたような光景でした。私たちは、日本人世話会の案内である寺の本堂に案内され、その夜はそこに泊まりました。夕食にはお粥が出されました。そのおいしかったことは筆舌には尽くせません。逃避行中は、ソ連兵や朝鮮人に見つからないように努力をしていて、絶対煮炊きはしないように申し合わせていて、干飯とか炒り豆とか生米などを食べていたので、ソ連兵などに対する心配をしないで食べる温かいお粥は別格で、天国にいるような心地でした。

一夜明け、京城駅からは客車に乗って一路釜山へと向かいました。途中、車内ではほとんど寝ていました。今までの疲れが一度に出たのでしょうか。釜山港に着いたら、またDDTの洗札を受け、興

安丸という名前だったと思いますが、引揚船に乗船しました。三時ころ釜山港を出港しましたが、そのときには興安丸の半分くらいの大きさの船が同時に出港しました。出港したときは並行して走っていましたが、一時間くらい経ったころには興安丸から引き離されて、水平線の彼方に消えていきました。今まで私の周りから消えていった人は皆死んでいきましたので、遠ざかって行く船を見ていても何か寂しい、そして嫌な気持ちになりました。夜になると、船室で皆ぐったりとして寝込みました。

だれかが「日本が見えるぞ！」と叫ぶ声で目が覚め急いで甲板に出ると、遠く小雨に煙っている山々が見えました。あれが日本だと思いと、感無量になりました。仙崎港に着いて、小舟に乗り替え上陸しました。初めての日本の土だと感激でした。小雨の中の上陸で、世話人の案内で、あるお寺に向かいました。その途中で、揚げ物をしている老夫婦がいました。あまりに良いおいなので

しげしげと見てみると、おばあさんが「引き揚げてきたのか、ご苦労さんだったなあ！」と言って、揚げたての薩摩揚げを新聞紙に挟んで「食べな！」と言ってくれました。空腹と雨に濡れた体には、素晴らしい贈り物でした。その美味だった味は、今でも鮮明に覚えています。

案内されたお寺は、山門を入ると右側に大きな椿の木があるお寺でした。裏山には杉林、その中に竹が混じっていました。私は椿、杉、竹を見たのは初めてでした。朝鮮には無い植物です。見るもの、聞くものすべて珍しく興味津々でした。

次の日の朝、仙崎駅に行つてまたびっくり。列車の小さいことでした。私鉄の列車だと思つていたら、世話人が「この列車に乗ってください、これは山陰線です」と言われました。その列車に乗って、三日がかりで父の故郷である水戸駅に降り立ちました。駅前には、一面焼野原でした。父の生家に行くつと、米軍の爆撃で焼き出された父の弟一家が、バラックを建てて住んでいました。七人家

族の所に私たち六人が転がり込んだので、大変だったことと思います。父の旧友や祖父の友人などの助けもあり間もなく、バラックでしたが一戸建ての家が借りられて、そこに引っ越しました。その後、父は「昔は昔、今は今。職がないときに仕事があるだけでも有り難いことだ」と言って、旅館の下足番に就職しました。そこで一生懸命働いている父の姿を見て、ただただ尊敬と感謝の念でいっぱいでした。

私は、ある日県庁で臨時職員を募集していることを知り、県庁に行きました。廊下を歩いていると、開拓課と書いた部屋があつて、その入口に「開拓者募集！」と書いた貼紙があつたので、何でもよいからとそのままに応募しました。五日ぐらい経ってから、開拓課から採用通知がきて、友部駅に十時までに集合と書いてありました。行ってみると、ほとんどの人が兵隊帰りで、私が一番若いようでした。連れて行かれた所は戦時中の兵舎跡で、私たちよりも先着の人が大勢いました。

毎日何もせずに三食食べさせてもらった上に、風呂にまで入れてもらえて極楽だなあと思っていたのですが、十日も過ぎたころになると、朝食後、唐鍬を持たされ広い草原の開墾をさせられました。唐鍬の使い方を教わり、一時間くらい作業を続け「一服です。休め！」という号令が掛かり、やれ助かったと座って手のひらを見ると、大きな豆が幾つもできていました。一服後唐鍬を持つと、痛くて力が入りませんでした。弱音を吐いてはいけないと頑張りました。昼食時には、豆が潰れて箸も持てなかったのを覚えています。

次の日になると「こんな仕事はやっていけない」と、何人もの人が止めて行きました。私も一緒に止めようかとも思つたのですが、私には帰つてもあのバラック建の家では居場所もなく、北朝鮮からの引揚げ時の苦勞を思うと、まだまだこのくらいのは苦勞の内には入らないと思ひ直して、残ることにしました。食糧難の時代、三食気楽に食べられるなんて天国のようなものです。

そのうち、私たちの組から五人が選ばれ、神立という所に送り出されました。そこには開拓事務所という県の開拓課の出先事務所があり、毎日毎日測量のポールもちをさせられました。藪の中や水田の中にも入りました。夏は蜂に追われ、冬は氷が張った水田に素足で入ることもありました。この作業も、北朝鮮からの逃避行と比べると、よっぽど楽でした。そのうち入植地も決まり、地区ごとに現地に行きました。松林の中に天幕を張り、十四人で共同生活が始まりました。ほとんどが二十歳以上の兵隊帰りで、十八歳は私ともう一人予科練帰りの人がいましたが、今までそれぞれ全く違う環境にいましたので、いろいろと文句を言われましたが、北朝鮮にいたときのことを思うと全然問題にならないことなので、あまり苦になりませんでした。

少しずつ畑も増え、一人当たり三反歩、約九百坪になったとき、個人個人に別れることになりました。農業に経験の全くない私は、百姓一年生で

した。まず、畑を一坪でも多くしようと開墾に精を出し、また食糧を確保するために、合間を見ては農家に日雇いに雇われました。日当はさつまいも一貫目、約四キログラムでした。十日か十五日働きに行き、食糧が貯まると開墾に精を出しました。だんだん畑が広くなってくると、苦勞も苦勞とは思わなくなりました。だが本当の農業を知らない私は、やがて農業の難しさを思い知らされることになりました。「蒔かぬ種は生えぬ」と言いますが、開墾地の畑は原野の地中で生きていた昆虫が春になって出てきて、発芽した作物の芽を食べてしまい、雑草だけが大きく育ち、結果は「蒔いた種は生えなくて蒔かぬ種が生える」ということになりました。農業は雑草との戦いでした。何年もかかって割り当てられた一町八反歩の土地を農地に変えて、やっと一人前の農家になりました。

何とか生活にゆとりができて、同窓会にも出られるようになりました。気が付くと六十年が過ぎ、七十七歳になっていました。私の年代のものは波

瀾万丈の人生だったと思います。子供のころが、今と同じ物の豊富な平和な時代でした。私が小学校一年に入學した年に日支事變が始まりましたが、生活は何も変わらず良いときを過ごしていたのですが、小学校五、六年になったときに大東亜戦争が始まり、途端にいろいろな物資が無くなりました。食べる物、着る物、履く物などすべての物が無くなり、命までが無くなっていきました。その後京城商業に入り、三年生の十一月に父の転勤で清津商業に転校しました。それから、前述のようないことになりました。

今の時代は、平和ボケするくらい恵まれたときです。敗戦後、日本に帰りたくても願いが叶わず、途中で病死したり栄養失調で死んだ人々が大勢います。その人々の分まで長生きして、平和を守って次代の人々に伝えたいものです。

それにしても、忘れることのできない二人の人がいます。その一人は、父の頼みによって電信課や電話課の若い人たちを、京城まで連れて行って

くれた、スムラのことです。彼の誠実さは今でも尊敬しています。だが、残念ながら彼の朝鮮名は分からないのです。七十七歳になった今日、人生の終点も近くなって、ぜひ会ってひと言感謝の気持ちを伝えたいと念願するものです。それともう一人、生死を共にして咸興までたどり着き、ここで別れた金崎君です。二人の消息を知りたくて、私はいろいろと手を尽くしたのですが、残念ながらいまもって消息がつかめません。まだまだ書きたいことはありますが、体調を崩したのでこの辺でペンを置きます。

終戦から六十有余年になる今、あの当時のことを回想し、心から平和を祈ろうとの思いで書きました。